

I 事業の概要（地域の実情含む）

地域の復興や水産業等の発展が進められているなかで、本校は専門高校として地域の復興や社会の発展に貢献し、自ら学び・考え、主体的に行動し、地域産業の担い手となる人材の育成が求められている。

そのなかで、沿岸部と内陸部の生徒間の交流を通して、生徒が復興の現状を理解するとともに、地域の復興や町づくりへ主体的に参画する意識を高揚させ、学校や地域のリーダーとしての自覚と実践力を涵養する。

II 取組の概要

- 1 西和賀高校生徒会執行部を招待しての宮古地域震災学習
 - (1) 共同実習船「海翔」乗船体験
 - (2) 宮古水産高校の実習体験
 - (3) 宮古地域震災学習
- 2 宮古水産高校生徒会執行部による訪問
 - (1) 地域生活についての学習
 - (2) 生徒会交流会（行事に対する情報交換）
 - (3) スノーバスターズボランティア

III 取組の成果と課題

- 1 成果
 - (1) 西和賀高校生徒会執行部を招待しての宮古地域震災学習
 - ア 共同実習船「海翔」乗船体験
「震災があった宮古地域を海から見る」、「宮古地域での漁業体験」、「大型船の乗船体験」の三つの観点で実施した。西和賀高校の生徒は、大型船に乗ることが初めてで、船酔いをしていただけで、大型船での生活を学習できる良い機会となった。また、本校の乗船実習について理解でき、本校の生徒たちの学習や生活を知る機会となった。
また、イカ釣り体験実習では、海での漁業について理解することができた。乗船して海から地域を見ることをとおして、津波の恐ろしさを想

像したり、町の復興を肌で感じたりすることができた。



（イカ釣り体験と海翔乗組員との集合写真）

イ 宮古水産高校の実習体験

専門高校を知ってもらうという意味合いも込め、本校の特色ある実習を体験した。缶詰製造体験やダイビング体験をとおして、宮古地域の主要な産業の一つである水産加工業の大変さについて学ぶなど、本校や地域産業について理解をすることができるとともに、本校生徒の学校生活を知ること、より関係性を深めることができた。このことは、今後の交流のさらなる活性化を進めるものとなると考えられる。



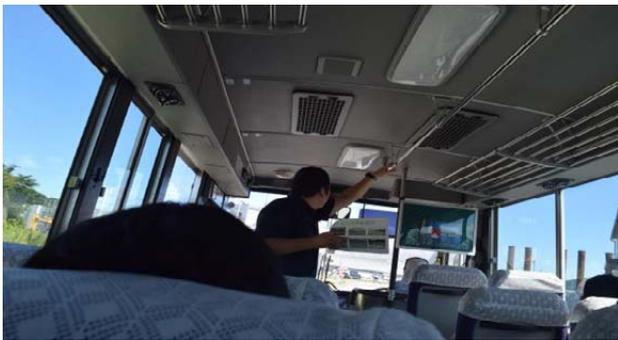


(缶詰製造体験とダイビング体験)

ウ 宮古地域震災学習

乗船体験中に津波の実際の映像を見て、東日本大震災津波に関する学習を行った。次の日、実際に映像の現場を訪れ、震災からの復興を見ることができ、震災被害の甚大さや津波の怖さ、復興のあゆみについて理解できた。また、移動のバスの中で、本校の生徒が震災時の状況を話すことで、西和賀高校の生徒は「生の声」を聞くことができ、津波被害の実態や復興までの大変さを学ぶことができるとともに、生徒間の理解を深め仲間としてつながりを強めることができた。

また、実際に宮古市の広域総合交流促進施設「シートピアなあと」を訪れ、津波が来た高さのラインを見ることなどから、より一層津波について知ることができた。



(津波被害の説明と施設見学)

(2) 宮古水産高校生徒会執行部による訪問

ア 地域生活についての学習

今年度は西和賀町雪国文化研究所の方々に「雪がある生活」について講話をいただいた。本校の生徒は、雪がある生活には慣れていないため、初めて聞くことが多く、文化や生活の違いを実感できた。また、かんじきを履いて雪上を歩く体験をさせてもらい、より一層沿岸部と内陸部の自然や生活の違いについて理解を深めることができた。



(雪国生活説明とかんじきを履いての雪上歩行体験)

イ 生徒会交流会 (行事に対する情報交換)

今年度は各学校の行事に関する情報交換会を行った。グループをつくり各学校での特色ある行事について話し合うことで、互いの学校で行っている行事を新しい視点で見ることができ、それぞれが今後の生徒会行事の運営について考えられるよい機会となった。



(話し合いの様子)

ウ スノーバスターズボランティア

毎年、西和賀町社会福祉協議会にお願いをして、本校と西和賀高校と一緒に西和賀町の雪かきボランティアを行っている。雪かきを体験したことがない本校の生徒達は、一生懸命がむしゃらに雪かきを行っていたが、日頃慣れている西和賀高校の生徒たちの無駄のない動きを見て雪かきの大変さを身近に感じる事ができた。雪国での生活の大変さやボランティアの必要性を理解するとともに、西和賀町の地域の方々から感謝されたり、話しをしていただいたりすることから、地域社会に役立つことを主体的に実践していくことの意義とそれを自分たちの喜びとするできた。



(スノバスターズボランティア)

2 課題

西和賀高校と本校の交流会は今年度で21年を迎えた。今年度は始めて、西和賀高校が本校に来校し、生徒たちは、海がある生活、震災のことや現在の復興状況などを知識だけでなく肌で感じる事ができ、大変貴重で意義のある経験になった。

しかし、震災の風化や進んでいない復興などの実情もあることから、これからの復興教育という観点を持ちながら、より一層内容の吟味及び入念な準備をして取り組む必要がある。それぞれの学校や地域が災害に対してどのように備えているか、自分たちはどのような役割を果たすべきかなど、復興教育にかかる共通のテーマについて、市や町などとの連携

を深めつつ、フィールドワークを通じて実際の状況を確認しながら、情報交換や意見交換を主体的に行うなどの取組が考えられる。

また、東の端から西の端の移動のため移動だけで時間がかかってしまうことは課題である。実施時期に関しても普通高校と専門高校の行事日程の違いにより実施時期の設定が困難である。しかし、この違いこそが交流の必要性の源であることを互いに確認し、更に綿密な打合せにより調整を重ねて実施していきたい。